

宍粟郷土会報

No. 38

46.5.1

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話 ② 2000

山崎騒動

堀口春夫

この山崎騒動は、旧幕時代の所謂お家騒動の一つである。この事件には、美男美女といつた立役者もなく、大悪人らしきものも見当たらないので講釈師の飯の種にならず、縦つて世間一般にあまり知られていないことになる。時代は家光將軍の頃、即ち寛永十七年のことであつた。この時の山崎藩主は、池田輝澄である。

池田輝澄は、輝政の四男で、元和元年六月宍粟郡三万八千石の領主となつて、当時の広瀬郷篠の丸下（現在の廉沢）に構を設け屋形を造営して居城。山崎町が初めて城下町として出発したのである。そして寛永八年には約三万石（佐用郡）を加増され、山崎町は繁栄の一途をたどつたが、寛永十六年（一六三九年）に騒動が起つたのである。

目次

山崎騒動	堀口春夫	一
大江山の酒呑童子（下）	中村 潔	四
寂心上人伝	杉山よしあき	六
供出梵鐘の銘		七
西播怪談実記抄		九
島下八重子さん	安井俊二	十〇
千年家修理竣工		十二
歴史研究部便り		十二
町史刊行		十二

ことの発端は、山崎家中新参ではあるが、六万石の旗奉行別所六左衛門の小頭が、六左衛門の妻の金子であると称して自分の支配下の者達に小金を貸していた。便利だからわれもわれもと借手が多く、他の支配の足輕共もこれを借りて利用するようになった。この内に家中古顔の鉄砲二十挺預る石丸六左衛門、小川三郎兵衛の組の者があつた。借錢は三百匁ほどであつたのを、少しづつ返済三十匁になつた時、突然皆済を迫られ、いかに工面しても払えないので、猶予を願つた。別所の小頭は「人のものを借りて約束を違えたのは奇怪である」と盆おくりの済んだあと、石丸、小川の足輕屋敷の近くに出向き、兩組の足輕を打擲した。これは、古参組と新参組の争い

の口火となつたもので、遂に大喧嘩に發展して乱斗がつき多くの犠牲者を出す始末となつた。

この為十一人の物頭が協議の結果、その様子を聞き調査の上で、喧嘩した者の扶持を離して一応事件落着となつた。しかし、旗奉行別所六左衛門は、よく考えてみれば、この騒動の原因は、元来石丸、小川組の足軽たちの不届きに初まつたもので、自分の小頭を同罪にされたのは不服であると、家老の小河四郎右衛門に訴え出た。そこで四郎右衛門はある日、喧嘩を取扱つた十一人の物頭を呼び出し「何とか別所の組にも少々勝ちをつけて彼らをなだめてほしい」と談合したが、物頭たちは喧嘩は、理非でなく双方同罪であることが大法である。殊に別所の妻の金子から起きた事件だから、主君が聞かれてもよろしくないで同罪にしたと譲らない。伊木伊織がこれを聞き、小河と十一人の間を云いなだめてこの事件を済めた。

伊木伊織は、宗家の家老伊木清兵衛の二男で、大阪の役のあと本多忠政に仕え後浪人としていたのを元和四年五千石で家老として召抱えられた。また秀頼の儒者を勤めた存庵という者も本多家に仕え後浪人していたが、輝澄側室の甥である縁故で召抱えられ、菅友伯と称して寵遇をうけていた。尚、友伯は小河四郎右衛門を推挙し、武功ある者として三千石を賜つて、友伯と車の両輪の上

に勤めていた。旗奉行別所六左衛門も友伯の世話で寛永元年召抱えられたものである。

輝澄は、江戸屋敷にいてこの事件を知らなかつたが、友伯は江戸にいてこの件を知り「十一人の取り扱いは甚だ不埒である。別所は不快に思うであろう。伊織の計らひもよろしくない」と八月上旬に書状を物頭に送つた。そこで物頭たちは、立腹して伊木伊織に相談を持ちかけた。一方別所はじめ友伯方は、小河四郎右衛門に相談した。これから家中が二つに分れて騒ぎは大きくなる一方である。

宗家岡山藩池田光政は、牧野能登守らをもつて輝澄に意見し「友伯に暇をやるか、此方に預るか、四郎右衛門は武功ある者だから自然要職を許し、伊織は今まで通り勤めさせたらよからう」と再三忠告したが、輝澄は、気に入りの友伯を信じて、伊織と十一人の物頭たちを疎んじたので、彼等は家中を立退りとした。輝澄は小河を江戸勤番とし、藩へは沖右馬丞を使者として帰国させ、一同堪忍して留るより命じた。

物頭たちの決意はかたく、十二月二十日に十一人出奔し、翌二十一日にはその親類、縁者、同志の輩百余人も続いて出奔したという。伊織は一人留つていたが、翌寛永十七年春遂に出奔した。これは、家中で臆病者と取沙汰されたので決行したものだ。伊織は大阪に行き、鬻を切

つて一扇と号していたが、ついに江戸に出て上裁を仰いだのである。

当時山崎町の地元は云うに及ばず、江戸はじめ全国にこの噂が持ち切りであつたことは想像できる。諸家預けとなつたもの約二十人で、池田輝澄は、

一、領内の仕置き行き届かず、家来まかせにして騒動におよぶこと不調法

二、一門の意見を聞かなかつたこと

三、後嗣虎之助の病気を報告しなかつたこと右三ヶ条により宗栗一佐用六万八千石没収と決裁あり、輝澄は因幡国廉野に配流、賄料として、播磨国神東郡、神西郡のうち一万石を支給するということになつた。この判決言渡しは七月二十六日である。

伊木伊織に対しては「家老の身として傍輩に対し私の遺恨をいたし、主人を軽んじ大勢立ち退いたことは不届につき父子ともに切腹」という裁決。菅友伯は断罪、小河四郎右衛門は相馬義胤へお預け、別所六左衛門、小川三郎兵衛、石丸六左衛門は、仙石政俊、南部重直、丹波亮光へそれぞれ御預け他は切腹申付で、その子供全部に死を賜つたという。

次に参考までに諸家預け氏名は

松平光仲一 小河四郎右衛門、別所六左衛門、牛尾四郎左衛門

松平輝興一 伊木伊織。大原久右衛門

井伊直好一 丸山忠兵衛。杉谷大左衛門

真田信政一 田辺勝右衛門。小川三郎兵衛

丹羽光重一 石丸六右衛門、小寺八郎右衛門

戸沢政盛一 菅友伯

堀直定一 宇津孫右衛門

池田長常一 鈴木平右衛門、山脇久左衛門

松平万助一 名倉喜左衛門

堀直時一 寺西忠左衛門

内藤忠興一 山本喜右衛門

津軽信義一 里川徳左衛門

尚死を賜つた小供たちは、

伊木伊織の子門四郎

(四才) この年に生れた男子(一才)。大原久右衛門の子与兵衛

(二十七才) 八助(二十才) 兵衛(十六才)

兵庫(十四才) 上阪監物(十一才)。山脇久

物(十一才)。

山脇久

物(十一才)。

山脇久

物(十一才)。

山脇久



左衛門の子久八（十八才）杉屋太左衛門の子亀之助（二十一才）。黒川徳左衛門の子武兵衛（二十七才）。鈴木平右衛門の子申助（十七才）兵太夫（十五才）。丸山忠兵衛の子半助（二十八才）平四郎（二十三才）久太郎（十三才）寺西忠左衛門の子九郎右衛門（三十才）山本喜右衛門の子権左衛門（三十五才）名倉喜左衛門の子畑多門（九才）小寺八郎右衛門の子七兵衛（二十四才）山三郎（十九才）六郎兵衛（十三才）菅友伯の子右馬助（十八才）

池田輝澄は、將軍家外孫として、噂には駿河十八万石に転封加増されると云われていたほどであつたが、山崎に城下町を開いて二十五年で没落してしまつた。「廢絶録」という大名没落の番物が出版されているほど多くの大名がつぶされたが、輝澄もその一人で、徳川家光時代の一番烈しい幕府攻勢に逢つたものだが、子供に及ぶ刑罰は、何んといつても無慘至極なものである。

大江山の酒呑童子(下)

史実との関わり

安志 中村

潔

この物語りが、この伝記が、ほど史実そのままと云うことは、無論云えない。鬼そのものの正体については、次の項にゆづるとして、日本の国に始めて武士と云うものが勃興して来たあの時代に、この名門出の「武士」と云

う新興勢力へ反抗する幾多の種族のあつたこととは否むことは出来ないだろう。また当時人文極めて低く、人々の生活も容易でなかつたあの時代、数多くの難民や山賊匪賊が随所に存在したことも想像に難くない。そうした山賊共のうち「酒呑童子」を首魁とする一団が、都近くの大江山に蟠居し、都近辺を荒し騒いでいたのを、特に王城鎮護の勤めを持つた源家の武士に攻められると云うことは当然の帰難と云えよう。更に又、攻め手の大将が、当時の一番かつこの好い武士の花形、源氏の頼光といふことが一層この物語りを魅力的のものとしたのである。ですから、当時の世に華々しく喧伝され、後世迄文学的にも色々と脚色され粉飾されて今日に至りました。

室町時代の謡曲大江山

全 お伽草紙、絵巻物

全 伊吹山絵詞

江戸時代、酒呑童子枕言葉（近松門左衛門）

全 傾城酒呑童子（同）

歌舞伎狂言当世酒呑童子

一中節四天王大江山入り

等、文学上、幾多の名作が残されて来ました。さてここで、この物語りの上に、大きな疑惑が持たれるのは、昌頭に掲げました「鬼退治のうた」の文句の中の

昔丹波の大江山



鬼ども多くこもりいて
都に出てはくく云々の

あの所ですが、現在の大江山は、地図を開いて見れば判る通り、京の都から略々二十里は距つています。いくら体の頭丈を鬼共でも、京へ行くには、ざつと一日はかゝる行程であります。それが京の都で重い金銀財宝や女人迄も掠め奪つてサーと引き上げて行くには、余りに鬼共の根城と距り過ぎてゐる。満洲の馬賊のように馬にでも乗つて敢行するのなら可能だつたかも知れませんが、そ

れは考へられないし、詮索して行く中に次のことが判然しました。京の西方、亀岡へ行く間に、あの光秀の「本能寺事変」で有名な「老いの坂」があります。この老いの坂近く「大枝山」と云つて、これも大江山と同じくオーエ山と呼び、同じその頃の鬼共の根拠であつたことであります。こゝからなれば

鬼共は京の都へ奪掠に出てゆつくり鬼の住み家へ帰つて来られます。ですから酒呑童子の一团は最初は、この大枝山に居て、源家の待達の征討を受け、終りには現在の「大江山」一丈ケ岳の方へ移り逃げて居たのを、大將の頼光一行に壊滅させられたと見るべきでありました。現に加悦町の町誌には現在の丹後の大江山は、丹波の大枝山の出城であると、はつきり載せています。

酒呑童子と鬼どもの正体

今日の世から考へて、いわゆる地獄極楽のイメージから想像される鬼共が実際に居たと思う人は誰もありません。

一部専門史家の言では「酒呑童子」とは、京の都の北方、八瀬附近で繁栄した帰化人の一族があり、その長者の豪族の名である。そして、八瀬童子とも称せられ、むしろ当時としては在来の日本人よりも文化的にも優れ、醍醐帝以来租税赦免の特例地となり、皇室の御用にも度々奉仕している。又「酒造の技術」をも伝えたといはれている。故にこそ「酒呑」の名があつたのであろう。しかし彼等も繁栄して行く中に、中には豪奢に耽つたり、無謀悪逆の者も出て、その兇悪な一団が丹波丹後の方面へ出て、「鬼童子」といふ狂暴な山法師となつたり、その別派が、有名な羅生門の茨城童子や、江州鏡山の「ひはだの長」等になつたのであろう。と述べて居ます。



かくれ住んでいたが、後丹州大江山千丈ヶ獄に移り住んだと在る。その考証の仕方は紛々として区々まちまちで、正確なものはない。しかし当時の暴悪無頼の徒であり、山賊山窩の類いの親王が酒呑童子であり、他の鬼共は、その手下、子分であつたことに間違いはない。それが、常人以上に筋骨逞しく、精顔で、どうもうで、狂悪なれば誰しも鬼と思うであろうし、その上、他を威赫制圧する為に、赤毛のかつらを、冠つたり、時には草根本皮で、体を青く或は赤く塗つたりしていた為青鬼赤鬼と称せられたのであろう。更には角のついたかつ

丹後考という書には「酒呑童子」は越後国蒲原郡沙子塚村の産なりとあり、北越雪譜といふ古書には、やはり越後出なりとし、始め雲上山国上寺の行法師であつたことを述べ、現にその屋敷跡がある」と記している。越後名寄と云う書には、やはり蒲原郡の都和野村から、久賀躬の山寺へ入り、さらに同山東稻馬に

らで人をおどしたり、今から考へれば本当に他愛もない暴徒達であつたのだから。更に又、一歩進めて、いや大陸から漂流して来た異人種であろう。だから人の生き血を吸う、いや人じやない、掠め盗んで来た牛の血だ等と種々の臆説を上げれば切りもありませんが、上記のように、当時の匪賊暴徒といふことで、この拙稿を終らせていただきます。了。

播州八徳山 寂心上人伝

杉山よしあき

今から九百五十年ほど昔に、播州神崎郡の八徳山に寂心上人という高僧が住んでいられました。寂心上人は、もとの名を慶滋保胤（よししげやすたね）と言いました。加茂忠行という人の第二子であります。加茂家は代々天文や暦数の学問を伝えて、朝廷に仕えていました。保胤は文学を好み菅原道真の孫の文時について学び宮内大記という位にまで上りました。職業をかえたので姓を慶滋（よししげ）と改めました。加茂も「よししげ」と訓みますから、そのようにしたのです。

保胤は少年のころより浄土の教えを信じ、念仏を称えていました。四十才ごろ寛和年中に『日本往生極楽記』という本を書いて、その中は四十五人の伝記を集めてい

ます。この本が日本の浄土往生伝の最初のものであります、この本は中国（そのころの宋）まで送られています。保胤（やすたね）は文学者としても有名でありまして保胤の書いたものも沢山あつて『本朝文粹』に収められて今日まで伝わっています。

保胤は、康保元年（九六四）に朝廷の大学寮の学生（がくしより）たち二十五人と共に「勸学会」（かんがくえ）という会をつくつて浄土の教えを研究したり世の中へ広めました。保胤は

方今一切衆生ヲシテ諸仏知見ニ入ラシメ、
無量ノ罪障ヲ滅シテ極樂世界ニ生ゼンニ
ハ阿弥陀仏ニ勝ルモノナシ、故ニ名号ヲ
唱フ

と言つています。この「勸学会」という会は永観二年に（九八五）解散しました。そして保胤は寛和二年（九八六）に出家して寂心と名のり比叡山で仏教を研究して後に高僧になられました。出家するとき

赤ちゃん用品は何でも揃っている

ミナミ

高野真 赤ちゃん堂

山崎町本町通り

電話②二七七〇



うき世をばそむかば今日もそむきなむ

明日も有りとはたのむべき身か

と詠みました。寂心上人のことを、世間の人々は「内記入道」さまと言つて尊敬しました。寂心上人の友達には、多武の峰の増賀上人、恵心院の源信僧都、檀那院の覚運、安海上人、書写山の性空上人、などがあります。

寂心上人は、晩年になつてから、怒も名譽もすてて、播州神崎郡の八徳山に庵を結んで念仏を称えながら暮され、歳月を忘れて居られました。今から九百六十八年前の長保四年（一〇〇二）に播州八徳山で往生されました。いつ生まれられたのかわかりませんので何才でなくなられたのかわかりませんが、相当な高令であつたと思われまます。

供出梵鐘の銘(三)

光泉寺

功德山 光泉寺

十六代 釈 義 秀

明治三十一年一月十日鑄之

(註) 其他は寄付者氏名ばかり

目方 七十九貫五百目

随陽寺

今度宗祖見真大師六百五十回
御遠忌相当ニ付紀念為報恩鑄造之

仏陀結縁 什宝物

住職 池田 惠瑞

(特別寄附者人名三十七名列記)

南無阿弥陀仏 (火字なり)

龍眼山随陽寺

第九世住職 池田 惠瑞

台湾基隆 真嶋 政也

干時明治四十二年四月二十五日鑄造之

龍野町

鑄造人 中村 仁蔵

大阪高津在

鑄物師 今村久兵衛藤原清久

(檀家總代其の他二十二人の人名あり)

南無阿弥陀仏の大字がこの次にもある)

目方 九十七貫五百目

八幡神社

播州宍粟郡柏野庄山崎有 八幡太神靈廟近

里遠郷老弱貴賤無不詣之而揚惟

八幡太神者軍師靈神安治国家鎖護弓箭因之良將雄士所

續連歩敬之崇之奥 賢王松平石見守輝澄公之夫人會發誓
願造管瓊樓 陶鑄華鐘掛之 神前以備晨昏見者生善因聞
者脱苦報功德靈異無量無辺所稱 神慮何物如之所庶幾者
賢主輝澄公遺令永保武運大昌祝々

銘云

神威如在 感応堂々

新現至驗 弘発和光

壳鐘鑄就 高掛官廊

華鯨打擊 蒲牢形相

東迎曙色 西送昏黄

景陽扣月 豊嶺鳴霜

随風響遠 出花声香

驚煩惱夢 余積善慶

朝暮警誠 国家禎祥

賢主德沢 地久天长

寛永十二曆乙亥孟夏吉辰

前住妙心江山叟孟謹誌

施主

四位待從源朝臣輝澄之夫人

治工 長谷川孫兵衛藤原吉次

源輝澄朝臣之夫人所瓶之鐘生覺隙就破裂

矣、郡牧從五位下池田豊前守源政元資其

旧改鑄之

延宝四丙辰之春三月十三日

治工 長谷川孫兵衛藤原吉正

宋粟前領主池田源政元公之所改鑄之華鐘
復就破裂牟 今領主本多肥俊守藤原政貞

君重鑄之嬰先列云弥

貞享四年歳舍丁卯九月二十四日

台宗沙門 義天謹誌

治工 長谷川三郎兵衛藤原宗繼

同孫兵衛尉藤原吉繼

最上山經王堂

大正十三年甲子五月鑄造

鑄造人大阪市高津住

今村久兵衛作之

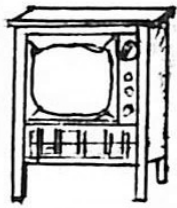
(他に寄付者氏名ばかりの時鐘であつた) (完)

三菱カラーテレビは
パイオニアステレオ

竹中電機

山崎警察前

電話②〇六六九



西播怪談実記抄

山崎の狐人を殺し事

宋粟郡山崎の御蔵本出石という所に在(町を六、七町隔)。正徳年中の事なりしに、此所の米蔵に狐子を産けり。ある時山崎の町人弥兵衛というものの子あそびに行て、彼狐の子を一つ取出し、もてあそびしに、いかがりたりけん死けり、それより四、五日も過て、弥兵衛が妻其子をつれて夜に入つて出て帰ねば、更て町内を尋廻りけれども行方しれず。いかなる事にやと、一家は申に及ず隣町のもの迄来つどひ、翌日は手わけをして尋ねければ、子は出石川に沈に懸てあり、母はひじ村という所の七里か岡という峠に葛にて幾重ともなく留もなく巻て大きな松の枝に三、四間引上げられて死居けり。是狐の仕業と決しければ、刺史是を聞給ひ「憎き狐の仕業か子一つにあたら人間を二人迄殺しし事きくわい千万也、狐狩をして我領内の狐は一つも助けまじ」と家中百姓迄に厳密に仰出され既に日限定たる前夜に、出石の蔵奉行以呂波立右衛門というものの庭に狐二つ来りて、つくばい居たり。立右衛門いけるは「汝子の代に人を二人迄殺し事あまりなる致方なり。是によつて且那御立腹つよく、明日狩をして汝等を悉く殺さんと計給り。汝等又不便也。今宵の内に急ぎ何方へも立退べし」といければ

くすりは



あわや

山崎本町通り

電話②〇五七四

狐二つ階段の下に頭を伏て後に立去りしが、翌日さばかり嚴重の狩に狐一つも得給はずとかや。

後に或人申けるは、「夜更て狐の子のかわゆきも、人の子のかわゆきも同じ事なり」といひて、三、四人連れにて通りたる音しけるが、楮は其節たぶらかして出たるにや」と沙汰しけると也。此事山崎の内縁のものより聞ける趣を書つたうもの也。(巻二より)

宍粟郡鹿が壺の事

宍粟郡皆河村の内に鹿が壺という所在。安志村より三里半山奥、揖西郡林田へ流るる川上の留なり。茲に凡十四、五丈面の平岩在。其上を谷水ながるる也。此岩に大寸水瓶又は茶碗のごとき自然の穴あり。其数三、四十斗なるが、深さ何程とも知れず。此穴に何にても入時は、三日の内に大風雨発て洪水を成、民家を損ず。よつて人を禁ず。其廻二町余、大に生繁て其所のものとても行ず。是によつて鹿が壺と尋ねるものには、村中堅申合て、其

所を教ずとかや。或説には、昔いささ尾といへる鹿、此岩窟にすみて、其伏たる跡とて、鹿の形今にありありとみゆる。長二丈斗とかや。則此所の山神と現る。然後鹿が壺といひつたえたとなり。往年能化災崎の西福寺へ鹿が壺の事を委細に語る人ありしに、つくつくと聞給ひ「其所は必仙境なるべし」といわれしとかや。寒余聞にも類希なる怪地にして、自然も人行時は必兇事有と聞及ふ趣を書つたふもの也。(巻四より)

註 「西播怪談実記」は宝暦四年に発刊、第八巻まである。著者は佐用の春名忠成という。西播四郡の怪奇談を集めたもので、版本は得難いが、昨年神戸市松蔭女子学院大学から復刊されている。本郡関係二篇を紹介。

島下八重子さん

安井 俊二

八重子さんは昭和四十五年十二月三十日逝去された。本会報にもしばしば随筆を頂いて郷土の懐かしい昔話を思い出させて下さつたものである。去年の第三十六号の随筆旗結びが最後の寄稿となつた。

安しともさびしとも思ふわが一生魚つるとき
のなかりしことを。

余命今日清しくもあるか魚の背の青きにか

ぼす袖の香が高し

月の夜芙蓉に露は結ばむを病苦の涙枕ににじむ
おもほえず涙にじみき壁伝ふわれや蜘蛛よ
り醜かるべし

こほろぎの声細りゆく夜のいのり唯安らかに
死なしめ給へ

この歌今年の「白珠」一月号に載せられた短歌である
八重子さんは、安田青風氏主宰歌誌「白珠」の同人とし
て多年短歌に精進、そのせん細な感触をすつきりとまと
めて爽かな短歌を毎月発表されていた。その才筆は、
昭和三十九年発刊歌文集「露」が実証しているが、本人
は長篇ものが書きたくて、その晩年を期待していられた
と思うが、がんの為に念願を果さずに逝かれた。

本町山田町の生家に居られる娘時代に、朝日新聞の懸
賞小説に入賞されて、郷土の人の驚嘆を買ったこともあ
つた。それほどの才女である。記憶力がよくて、観察が
細かい。全く惜しい人を死なした。八重子さんは、死の
病床に臥しながら、上を向いたなり、何かと書きつがれ
て、作歌は勿論、当地のハリマタイムスにも殆んど毎号
その諄博な智識を使駆して、何かと珠玉の名文を寄稿さ
れていた。

昭和四十四年十二月には初音書房から「水響く」とい
う伝記小説を刊行され、その健筆を祝つて、出版記念会
に、

たえまなき掛保の川瀬のせせらぎのすがす
がとして書きつぐ君か

という歌を贈つたが、その後一年足らずのうちに去
つてしまわれるとは思ひ及ばなかつた。乳がんの手術さ
れたと聞いて案じていたが、経過良好の報せも空しくが
んに対する人間の無力さが残念である。

八重子さんは、明治四十年（一九〇七年）七月一日兵
庫県安栗郡山崎町山田町安田家に生まれ、昭和四年（一
九二九年）五月島下卯三郎氏と結婚、大阪市西区九条通
に酒類食品などの店をされていた。三男一女がある。

頂いた歌文集「露」の扉書に、八重子さんは
霜しろき枯野にひそと茜さす一茎の草と

われも生くべし 八重子

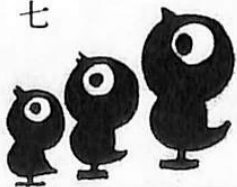
と達筆に書いていられる。とにかく惜しい人を死なした
ものだ。

安心して買える専門店の味

鶏肉・鶏卵販売

安東商店

山崎町八幡下 電話②〇九一七



千年家修理竣工

宍粟郡安富町皆河の千年家は、解体修理、復元を終り、去る三月二十六日竣工式が行われた。千年家は、重要文化財として有名な室町末期の民家で、一年一ヶ月の月日をかけて、千三百七十二万円の国庫補助で完成、この修理は、半解体で当初の架構そのままである。十本の上屋柱とそれをつなぐ柱貫、小屋梁などは古材と技法保存のため解体をさげ、その他を解体して補修、後世の改変された所は復原されたのである。

この家の柱は、栗材で寸法は一定していないが、特に太い柱もなく上屋柱は、一間ごとと並び、柱をつなぐ貫は太く、すべて「はまぐり刃のちような」が用いられている。

柱間寸法は、今の一間に比べて広い（現在の一間、六尺一―一九七釐は、桃山時代に定められたもので、それ以前は若干寸法が広い。この建物は桁行が六・六尺、梁間は六・九尺で一間が割付けられている。）

歴史研究部便り

昨年八月頃から、本会に研究部門を置いて造詣深い諸士の歴史面研究を大いに進めたいとの意見が出て、その発足を十月三日青年研修所で開催。代表者に宇野正瑛先生

を選任して、毎月特別テーマによる研究会を開くことを申合した。名前は、宍粟郡郷土研究会歴史研究部という。三月までの開催日は左のとおりです。

十一月二十一日―片山―志水両氏による古代の問題。
一月二十三日―堀口氏より近世山崎町城下町時代のこと
二月二十日―堀口氏山崎本多藩のこと。三月二十日―宇野氏の千種鉄について

町史刊行

山崎町教育委員会では、本年度は是非町史を出版したい意向である。本格的な町史は、時日と経費の問題で後廻しとなり後日完成を期しているが、現在の時点で、百ページあまりの「山崎町史」（仮称）とする予定。いづれ本会歴史研究部が中心となり、一般有識者の御協力を願うものと思われる。

横尾編物学院

山崎町西鹿沢

電話②〇一八七

